

坂の上には

カナタムメイ

私は今年で三十五歳を迎えます。娘に私の学生時代のことを聞かれます。そういう時に必ず、私はこう言います。「楽しみなさい。学生時代が一番楽しいのだから。」そして、娘が学校から帰ってきて、一日の出来事を話している笑顔を見ると、思わず私も微笑みます。ですが、娘が私の前から消えて、宿題をしに部屋に向かうと私は一人きりになります。すると、学生時代の一人の生徒を思い起こすのでした。今になると、方法は間違っていたにしろ、その生徒を理解できる面もあります。でもそれは理解であり、同意や共感ではありません。世の中が、世界が騒がしくなる報道を聞くと、私はその中に彼が紛れ込んでやしまいかと目を凝らします。英語やそのほかの外国語の音声の中に彼の言葉が入り込んでいまいかと、耳をそばだてます。ちょっとしたきっかけで、例えば街中で乱暴な声を聞くと、あるいは肩がぶつかり怒鳴られるとき、思い起こし、動揺して、娘や妻がいたりすると、「なんでもない」と答えます。よく人は嫌なことは忘れるようにできていると言いますが、どうも首をかしげたくなる考えのような気がいたします。多くは忘れる。小さいものほど覚えている。小さいものほど忘れにくい。そう言い聞かせてきた結果覚えてしまったのかもしれませんが。私は、小学校の時に太っているため、また、汗をよくかくので、「汗かきピッグ」と呼ばれ、小突かれ、叩かれ、散々な目にあいました。今思うと、もう少しましな反撃ができたと思います。そして、その後、身長が伸び、バランスが取れ、筋肉を鍛えたため、いじめられなくなりました。しかし、高校時代にいじめとは異質の事柄が身の回りに生じました。

もうかなり前だから、携帯電話が巨大な子機のようになっている前だったと思う。変な時間だった。転校してきた生徒は始業時間に紹介されるものだと思っていたからで、昼を過ぎ、生物の時間になって、教室を移動する前に、担任がいそいで教室に入ってきた。そのあとに誰も来ないので、再び担任が教室から出ていった。教室はいらいらしていた。一人の生徒と担任がしばらくして入ってきた。自己紹介をしなくてもよいと担任はその生徒に言い、生徒の名前と教科書のコピーを手渡して担任は出ていった。その生徒の名前は、青木という名前だった。教室の後ろに背の高い生徒に青木は近づいた。駆け寄って、いきなり殴りつけた。そして、その生徒の持つ教科書を奪い、コピーを投げつけた。その殴られた生徒は仲間にしきりに文句を言ったが、仲間は立ちすくんで、その生徒に対して説明のできない違和感を持った。不良生徒でもない、やんちゃでもない、繁華街にたむろしている連中の一人でもない、割り切れない、こういう奴とはっきり区分できない生徒だった。わからない。それが一番納得のいくその生徒の様子であった。何を考えて、どんな日常を送っているのか、両親は誰でといった想像を掻き立てることができないで何もかもが見えてこない生徒が青木だった。

青木の学力について分かりだした。数学はずば抜けていて、少なくとも大学の数学科の学生が学ぶ範囲まで手を広げていること、そして、英語は、ネイティブだと思える発音でおそらく海外で暮らしていたに違いないこと、弱点は国語で、比喩が分からない、心情を汲み取る読解力が劣っていることが二週間ほど過ごすうちにクラス中に知れ渡った。

私は、青木の行動が理解できずにいた。教師からは、哲学や人生観や世界観という言葉は聞いたが、腑に落ちず、ただ将来への不安があり、それは大人からすると大したものではなくとも、その頃の心の状態では、初めて大きく口を開けた構えで数年のうちにその際に立たされることへ怯えをとまっていた。進学ということも頭にはあった。

しかし、勉強ということと進学から先のことを私はつなげてしまい、科目自体に疑問を抱いていた。何のためにこの科目が必要なのか、進学から先の学問にどのように結びついていて、全部が必要なのか、好きな科目だけを学ぶわけにはいかないのか、つまり理工系に進学するのに、なぜ古文の活用を記憶したり、漢文を読めなくてはならないのか、なぜ世界史の些末な事柄を記憶しなくてはならないのか、個々の科目の必要性をしきりに求めていた。この「何のため」「なぜ」という思考が、問いが、青木の行動へもむけられていたのに気が付かなかった。青木は、なぜあのような行動をとるのかという問いをもとに青木を観察していた。だから、転校時に突っかかっていった背の高い男を二階の窓際の棚に不安定な椅子を置き、そこに立たせて、揺らしていることや黒板消しを頭になすりつけている行動をただ、なぜ?と考えて見ていた。他の連中は、困った顔つきをしている者もいれば、結託して、青木をつぶしてやろうと考える者もいた。私は、教室の一番後ろの掲示板の前に立ち、こちらに身をよじって話しかけてくる友人とおしゃべりをして、少しすると、青木を観察した。視線が青木と合った。すると、青木は、野性的というべきか、天才的というべきか青木にこそ持ち合わせている感で、この私の蔑視ともいえる観察という行為を見事に見抜いて、不自由なのか足を引きずるように駆け寄り、刺すような言い方をしてきた。

「おい、傍観しているなら、参加したほうが罪ではないだろうか」

「べつに、傍観なんかしてない」

「お前、お前は俺以上に悪人だな。」

いきなり胸ぐらをつかみあげられ、顎を見せ、無防備な喉がむき出しにされた。その気になればナイフを真横に滑らし、切り裂くこともできる、白い喉だ。その喉を青木が「観察」した。そして、品定めをした。喉ではなく、私の頭の中身だ。

「おまえは、アンモニアの製造過程やら二次関数の最大最小問題、子供向けの憲法と経済学のお話しか入っていない頭に違いない。安物のミニカーが詰まったような頭だ。無価値だ。」

掴みあげた腕を素早く元に戻し、去っていった。私は罰を受けたように感じた。他の生徒ではなく、私個人にたいして下された正当な罰に思えた。その罰は、傍観、観察への罰であろう。奇妙なことだが、青木という人間を、はげしく憎み、敵意に満ちて挑んだり、背の高い男への仕打ちをこちら側から正当に罰を下す気持ちに満ちていたり、善悪で判断を下して懲罰的に見ていたのなら、言いがかりをつけたりしなかったろうと考えた。というのも、「観察」にはこうした価値判断が一切臭わない見方であるから、それが気に障るという理屈も成り立ちそうだからだ。

月曜の午後、美術の時間だった。水彩画で、花瓶を描く授業だった。美術の教師は温厚な教師で、自由な発想と表現は結びついていると考えていて、あまり生徒の行動や態度について注意をしたり怒ったりなどは一切しなかった。だから、この時間だけは、皆は歩き回り、おしゃべりをしていても、課題にした絵や粘土細工を作ればよかった。もちろん青木も絵を描いていた。水彩絵の具でつかった筆洗いの水を交換するとき近くに近くを通りがかった一人が興味本位で、青木の絵を見た。

「おい、青木、こりゃなんだ？」

数名が駆け寄り絵を覗き込もうと背伸びをし、青木を取り囲んだ。花瓶であることは確かなのだが、かなり描きなおしをし、デッサンすらうまくできず、何度も描きなおしをしたので、紙自体がネズミ色に変色をし、筆圧の加減も知らないためか、腹立ちまぎれに描いたためか、鉛筆の筋が何本も残って、汚い絵だった。青木はうつむいて動かなかった。絵を隠そうともしない。取り囲んだうちの生徒は片岡は絵がうまいことを誰と話に伝え、青木の描く絵はあまり上手ではないことを付け加えて伝えた。確かに、片岡の描く絵は飛びぬけてうまかった。片岡は、将来は芸大に行く予定でいる。下手な絵であることを知り、同時に、青木の絵画の能力がほかの科目に比べて劣っていることや自分たちの描くものよりも下手であることを確認して、離れていった。

私の斜め前の大きな机の上で彼はうつむいて、消しゴムをゆっくりと引き寄せ、静かに動かし始めた。動きはだんだん速くなってきた。力が強くなったらしく画用紙がよれて音をたてながら、破れそうにへし曲がっていく。消し終えたと見え、次には2Bの鉛筆を持ち、その持ち方は描くときの考えられる持ち方ではなかった。鉛筆を垂直に立てて、握りしめたのだ。鉛筆の先を紙に突き立てると思い切り力を込め、やわらかい鉛筆の芯が崩れ始め、くだけていった。芯の屑が広がり、とうとう芯が潰れた。すると、もう芯が消えて砕けてギザギザになった鉛筆で、紙の上に向かって走らせると、紙は簡単に破ける音とともに裂けた。しかし裂けた紙を寄せ集めて鉛筆を振りかざし何度も何度も紙のあつまりに打ち下ろした。粗い息づかいをしていた。それでも打ち下ろすのを止めなかった。チャイムが鳴った。時計を見て、絵を提出しようと立ち上がると、視線を感じた。目の前に青木が立っていた。水彩画のバケツをひっくり返し、汚れた水をこぼした。当然、絵は台無しになった。あまりの行為に驚いて、青木を見た。教室の一か所から笑い声が立ちのぼった。私は確かに激怒して、青木を怒鳴りつけた。すると、青木はポケットから一万円札を出し、私のポケットに無理やり入れた。そして、美術室から出て行ってしまった。

職員室に向かって歩いていた。青木からの一万円札を直接返すことは、何かしらの罫のようであり、問題が生じることは分かっていたからだ。職員室の前まで来て、担任を呼び出そうと、顔をのぞかせると机を前に椅子に腰かけた担任が、立っている青木を前にして話をしている。美術教師が職員室に入ろうと私の脇をすり抜けた。そして、担任と青木の方へ机の間をぬって近づいていった。副校長が校長室から出てくると内容が聞こえたらしく、副校長も近づいた。担任がうなずいて、青木はゆっくりと報告をしているのだが、どう見ても先ほどの一万円札のことが内容のようだ。副校長が顔をしかめている。美術教師は眉にしわを寄せ、眩しそうな顔つきをしている。報告が終わったらしく青木は周りの教師たちに頭を下げると、職員室の出入り口に向かおうとして歩き始め、顔をあげた。視線が合った。青木は無表情で知り合いでないかのような素振りで脇をすり抜けた。その時「てめえを追い詰めてやる。絶対にな。」と小声で耳打ちした。担任が気付いたようで、入ってくるように言い、手招きをした。美術教師と副校長がそれにつられて目を向けた。

担任は事の次第を話し始めた。それは確認であり、誰かが青木を脅してお金を巻き上げているのではないかという内容であった。しかしそれが私であるということは一切言わなかった。ただそのような話を知らないかということを訊いていた。

私はポケットから一万円札をだしくしゃくしゃに丸まっていたので、伸ばして担任に青木が自らポケットに突っこんできたことを説明した。副校長は感情的な判断をして、誰かではなく私であったことととらえて叱りつけてきた。美術教師は何かを思い出そうとしていた。ほとんど眠っていたため授業中に何が起こったのかを覚えていない。担任は慎重な判断をしようと少し考え込んでいた。夕方に向かい始め、校庭から声が聞こえてきて野球部の練習が終盤に入ったのがわかった。美術教師は手を叩いて、用事を思い出したと担任に告げ急いで職員室を出た。副校長は先ほどから睨んでいる。お金は預かると担任は言った。そして、こういう場合にはおおよそ話がかみ合わないことが多いことと、私が青木を脅かして金を巻き上げていたことを双方から聞かなくてはならないことを説明をした。一番いいのは当事者を交えて話を聞いたほうがいいと付け加えた。そこで、明日の放課後に会議室でお互いの話を聞くこととなった。担任は、ゼムクリップで日付と場所を書いたメモを挟んだ一万円札を引き出しの中にしまい、帰るように私に言った。副校長は隣に立ってしかめた顔つきをしたあと、自分の机に向かって歩き始めた。職員室から私は出ると青木はいったい何を考え、私に何をしようとしているのか想像してみたが、掴めそうな位置にあるものが錯覚のため掴めずに手が空を握るような感じがした。いっこうに答えらしきものに至らないのだ。

自宅に帰ると、青木の顔が頭から抜けなくなっていた。普段見せている人好きしそうな微笑みは、心からの微笑みに見える。しかし、時として見せる表情のなさ、精神のすさみかたが度を越えていたことを表しているため、日常の多くの笑みは、その代わりに放り込まれた微笑みだ。それもずるがしこい人間がしそうな健康な微笑みにみえる。粗悪品を包むのに、せめて上等のラッピングをと考えてもらった包装紙のようだ。片足を引きずる不自由さは事故であったか原因が分からないが、囚人の足に付けられた見えない足かせに見える。髪の毛のきちんとしすぎたカットと軽いウェーブは、味もそっけもなく、マネキンのかつらの方がまだまじだった。背の低さは、相当なコンプレックスを抱えている目印のように見えた。まるで、青木は容姿そのものからして、憎らしげと毒味を人に抱かせる。何か、人を苛々させる姿恰好であった。駅やデパートの地下などですれ違おうとわざと肩を当てて、相手が文句を言ってくるのを待っているようなタイプに見えた。ジャケットとネクタイを放り投げ、ズボンを脱いで、丸めて、放り投げた。部屋の隅のゴミ入れに獣の皮のように垂れている通学服を見ていると、これらの衣類が青木の臭いをたらふく吸い込んでいるため、汚く見えた。椅子の背もたれにかかっているスウェットの上下を引きぬき出し、着こんで居間に向かった。母がテレビを見ていた。

「自首したんですって。この間の殺人事件。」

「何の殺人事件？」

「増えてきたからよく覚えてないのよ」

心がとがめたのだろうと思った。良心がまだ犯人にはあったのかと思うと同時に、自首をして減刑をねらったのかとも考えたりもした。そうした考えがいかにも青木が考え付きそうで、それよりももっと精密な考えで逃れる知恵に違いないと思うと、腹が立ってきて、「いっそ、死刑にしちゃえばいいんだ、人殺しなんて！」と、怒鳴った。母が心配そうな顔つきになり、「なに、機嫌が悪いの？」と尋ねてきた。

冷蔵庫の牛乳を取り出し、重さが軽いので、そのまま口をつけ飲みこもうとした。母が、洗濯物を取り込みに庭に出ていくところだ。

飲みこむ前に、とつぜん生臭いにおいが口いっぱいに広がり、粘っこい腐った牛乳が舌にまとわりついた。急いで、シンクに吐き出した。シンクに広がり、薄まった、腐った牛乳の上に白い糸くずのような形の虫が散らばっていた。それを流しながら、何度も口を漱いだ。

「臭いな。だめな牛乳始末してよ。腐っているよ。臭いな。」

掌を丸めて息を吐き、口臭を確かめたが、舌にしみこんだが見え、傷んだ肉を這う蛆を食べるとこんな感じかと想像した。母は、庭に出てしまい、聞こえていない。パックの中を見ると、よどんだ滓が底について異臭を放っていた。吐きそうになったので、息を止めて、そのパックをビニール袋に入れ、輪ゴムで口をきつく閉じ、ごみ箱に捨てに玄関へ向かった。玄関の玉石のたたきにゴキブリが死んで、脚を曲げたクリップのように伸ばし仰向けになっていた。トイレに行き、トイレットペーパーを多めに巻き上げ、ゴキブリをつまみ上げようとしたら、脚がかすかに動いた。急いで紙で潰した。飴でコーティングされた刺身をつぶす感じだった。青木の小細工だったらこんなことを平気でするだろう。そして、人をだまして健康そうな微笑みをたたえて、片足を引きずって、その場から立ち去るだろう。息が憤りで震えていた。

夜、父が帰宅した。急いで着替え、テレビの前に座り、チャンネルを変えた。

「ボクシングだよ、ボクシング」

「なんで殴り合いが好きなのかしら」

「殴り合いじゃないさ。世界王座、決定戦だ。見にやきやいけませんよ。」

「こないだの殺人事件、犯人自首したって、お父さん知ってた？」

「知らない。」

「ご飯は？」返事がない。

「お父さん、ご飯はどうしますか」

「う、うん、そこに並べといて、勝手に食うから」

ボクシングは中盤に入った。中だるみしていたので、父は少し苛ついていた。

「ああ、そういえば、あいつどうしたかな。ボクシングで、寝たきりになったんだ。ひどかった。」

「お見舞いに行った人？」

「ああ、そう、仲良かったし、よくご飯を食べさせてもらった。だけど、若いのに、もう白髪頭で反応がなくなっていたんだ。暴れることもなく、脳死だって言っていたな。おふくろさんが顔をさすって、少し浮かせて、せがれの舌を中に入れるんだ。あけびみたいなペロだった。そのペロが口んなかに、押し込んでも、すぐに飛び出してしまうんだ。」

テレビでは、フィリピンの選手の脛の上が裂け、耳から血が流れてあばらから、わき腹を伝わって、トランクスを汚していた。

「どうしてるかな、あいつ。強かったんだ。…ああ、血がすごい。止まらないな。やめた方がいい。止めろ、止めろ、…」

ドクターストップになった。負けた選手は、しばらくして歩き出すと、足元がもつれ、垂らした左腕を前にして、体がよじれ、頭が上を仰ぎ、マウスピースを吐こうとしているかと思うと、白目をむいて、そのまま崩れ落ちた。あおむけに倒れたまま動かなくなった。医師が駆け寄った。担架が運ばれた。指笛が単発で一つ、二つあって、場内は、咳払いと人が口々に話すから生じるのか、地鳴りのようなざわめきが沸き起こった。

「無理だよ、あの傷じゃ。頭、大丈夫かな。意識ないみたいだ。せっかく向こうから来てな。」

しばらくして、アナウンサーが緊張した声で試合結果を丁寧に伝えた。声のトーンを意識的に落としているのが分かる。

「お母さんとかどうしてるのかしらね」

「え？ああ、もう、かなり前だしな、俺のお袋より年いったからな、大丈夫だといいいけど、あの選手」
夜十一時近くになり、父は早寝なのですでに眠った。私は、風呂から上がり、自室に向かおうとすると、母が金魚に餌をあげながら、私に声をかけた。

「あの、いつだったかの、殺人事件の犯人、自首したって話したっけ」

「うん、聞いた、二、三回」

「おやすみ」

帰宅してから自宅で就寝するまでの間の時間帯が、青木が企画した悪趣味のツアーのように見えてきた。見学する建築、鑑賞するお芝居、みんなが眉をひそめる内容で満ち溢れている企画だ。汚い建物の二階にある事務所を考えて、違法に営業している旅行会社の社員が青木であり、その会社が考え、企画した一日体験のコースに参加させられた気分だった。買ってきて楽しみにしていた品物が傷んでいたり、壊れていたりしたのを目にする気分だ。明日は、青木の行ったことをすべて明らかにするつもりだ。

放課後、私は職員室に顔を出した。すると、T大卒なのに、日体大のシャツに赤いジャージを着た女の体育教師が、会議室で待っていると教えてくれた。会議室をノックして許可をもらって中に入った。青木はもう既に担任と話をしていた。私はあった出来事を説明した。青木はしおらしくして、反撃してこなかった。担任は一万円札を青木に渡し、私に向かって、帰るように促した。私は鞆を持ち、会議室を後にしようとした。それと同時に腰を浮かせた青木だが、再び座りなおすように担任に言われて座りなおす姿は、電気椅子に腰かける囚人のようだった。担任は、判事が用いる槌のように拳を机に振り落した。私が見ていることに気付いた青木の睨み方は、断頭台にひきづり出され、大衆を前に、死に際にすべてを呪い、恨みをたたえた者の目つきだった。腰縄のように会議室が私を引き込み、歩みがとても重く感じたが、抵抗に逆らって会議室を後にした。

「お前たちがいられるのは、俺がいるからだ。俺が、もし、いないなら、お前たちの一人は俺になったろう。」そんなことを青木は言ったことがある。当時、私には理解のできないことであった。今になってみると、仮に人を痛めつけるのをためらっていたとして、誰かが代わりに、人を痛めつけているのを見ること、その行いをするのを見ることで満足をする。この屈折した、間接的な代償としての要求をかなえているのが青木ならば、彼の言っていることのひとは理解できる。青木の存在は、私たちの欲求を、罪を負うことなく叶える存在だ、私たちの罪を負うのは彼自身であると、青木は、自分自身をそう位置づけたのかもしれない。

写真があったのだ。周りの同級生はそれに群がっていた。興味であったのか、自分たちの行いを密かにかなえたことに満足をして、けして責任を負うことのない安心を持って、眺めていたに違いない。だとするならば、青木の存在する位置づけの正しさを承認したも同じだ。

黒板に、熊のマスクをかぶった裸の女が後ろ手に二人、縛られて、背中合わせに座っている写真が張り出されていた。どこかのガレージのようであったし、その裸体の女たちを取り巻いている黒仮面をつけた男の中の一人は縄を持っていた。同級生は裸体の彼女たちを知っていた。しかし、誰かが、それをはがし、どこかで処分をしたようだ。群がりが見えなくなるころには、もう写真は姿を消していた。当然、写真を貼りだしたのは、青木であることは、皆知っていた。そして、それを咎めることもできたし、咎めないでいることもできた。青木は、その辺をよく知っていて、咎めに来れば、それに対して、善悪を説き罪悪感を抱かせ、咎めないでいるなら、その行いをしないでいることに対して、同じような目に合う。どちらにしろ私たちは悪いことをしているというのを身にしみこませる。青木は、私たちのこうした心の在り方を薄汚いやり方で裁くことについて長けていた。「おまえは卑怯だ」と青木を非難すれば、彼は平気な顔をして、「お前も卑怯だ」と言うだろう。実際、青木の言う通りなのだ。

背の高い男は、いつの間にか一部の生徒の玩具と成り果てた。青木が行った仕打ちは、この背の高い男を玩具として利用できることを知らせる結果となったためだ。ところが、青木はもう背の高い男をなぶったりなどはせず、無関心でいた。担任が私に仕掛けた罠を見破ったことは、青木がその嗜虐的な面を担任に向けていることは確かだろう。午後、食事を終え、昼休みの時に背の高い男が後ろの壁に背を向けて、その背を数名の生徒が何かを押し付けている。押し付けるごとに背の高い男は悲鳴を上げ、逆立つ毛のような笑い声が湧きあがる。彼らは、画びょうで背の高い男をさしていたのだ。いつまでたってもやめないでいた。すると、青木は机を両手で抱えると、ハンマー投げのようにして、教室の後ろに放り投げ、さらに椅子を振り上げ、投げつけた。工事現場の足場が崩れるような音を立てた。その音が数名の生徒を縮み上がらせたが、それを恥として彼らの意識に滑り落ち、真っ赤な熱を帯びた怒りが持つ酒気に似た不快な気分が吹き上げ、青木を攻撃しようとはびかかった。一人は青木の胸ぐらをつかみかかった。もう一人は、顔を殴った。残りの一人が足を青木の腹に蹴りこんだ。ところが、青木はこうした暴力に全く動揺しないばかりか、受け入れていた。源に鮭が帰るように彼らの荒さが青木を目がけて帰巢することは自然であった。いずれは飽和するため、彼らはだんだん気力と意欲をなくし、全てを受け入れた青木は、倒れ、埃にまみれていた体をゆったりと手を床に付け、起こし始めた。頭蓋骨が変な音を立てた。腕がねじれ変形し、骨が皮膚を突き破った。口を蹴りつづけたため、歯が霰のように血だまりに零れた。唸り声と痛みを訴える叫びで教室が怯えた。青木は足を引きずって、転がって腹を出している椅子や机を足で寄せると、机をつかみあげ、彼らの痛んで転がっているところを目がけて振り落した。机は、ばねのように弾んで、窓を割った。カニの足が障子を突き破ったように机の脚が窓の外に顔を出した。椅子をつかみ、椅子の足を二本持つと、背もたれの角で、彼らの体をしこたま打ち付けた。彼らは意識を失っているのもいれば、目を大きく見開いたまま仰向けになっている者もいた。数日後、青木は停学処分となった。

停学処分がとかれ、学校で、何日間かは、青木も何もしなかった。心の中では、私へ反撃をしようと考えていたことだろう。そして、担任に対してはいっそう強い憎悪を抱いたことに違いない。

体育の時間は、柔道の組手で、私は青木が攻撃してくるだろうと考えていたので、常に気を付けて青木を見ていた。柔道の指導者は体格のいいひげを蓄えた贈答用のハムに似た容姿だった。受け身もままならないうちに組み手をさせ、寝技に入った時に私はこのような時にこそ、青木と私は組むのだろうと予想した。恐れていたか、嫌なことを考えた時の方が、考えていることはよりいっそう事態が生じやすいことを知っていたからだ。一方、ついていたか、幸運や金運という事柄は生じにくいとあきらめていた。私個人には、少なくともそういう仕掛けになって、いいことは起こりにくいと思っていた。ところが、青木とは組むことがなかった。これが良かったことなのか、悪かったことなのかはわからない。結果として、決していいものと言えない状況に向かっていたためだ。

私とは長方形の柔道場の対角に位置するほど青木は離れていた。その青木と組んで寝技をしている辺りで騒ぎが起こった。柔道指導者が怒鳴って、止めている。私は駆け寄った。青木が、意識を失いかけ、口の端から泡を吹きかけている生徒にまたがって、前のめりになり、体重をかけ、喉仏あたりを両親指で押さえつけていた。親指が赤くなっているのは逆に締め付けられている生徒は目を死にかけるときの鳥のように細め、体は命を守るため、無意識に動き、青木の喉を押しつぶそうとして、柱のように直立している腕をつかんで、引っ掻いていた。ひっかき傷から血が垂れ、象牙色の柔道着を汚していた。指導員が青木の襟首をつかみ、強引に引き離そうとした時に、青木が力を意識的に抜いた。すると、急激に力が抜けたため、指導員はひっくりかえり、腰を打ち付け倒れてしまった。青木は、指導員の顔の横に駆け寄り、膝がしらを曲げ、脛を使って、指導員の首をつぶそうと足に体重をかけた。指導員は、腰をひねりバウンドし、反撃を試みるが、喉の圧迫が気道のほか、頸動脈を巻き込んで閉塞されたため、手を使って、青木を捕まえようと試みた。しかし、青木は、足だけを使っているため、上半身を捕まえて投げることができなかった。風船がしぼもうとするように指導員の力が入らなくなった。青木は、意識がとおのく指導員を見つめていた。誰かが知らせたのだろう、職員と上級生で柔道部の生徒が駆け寄り、青木を引きはなし、蘇生をする一方で救急車を呼びに柔道場から数名が飛び出した。青木は、退学になった。

私は、ガールフレンドのマキと体育教師の見舞いに向かったが、面会はできなかった。病室の階で帰ろうとマキとエレベーターを待っていた。エレベーターが開くと青木が立っていた。白い花瓶の首を二本指で挟み、残りの指で葬式用の花をつかんでいた。右手を見ると、黒い数珠が垂れていた。私は、こう問いかけた。

「人を、人の死がそんなに楽しいか。なぜ、人を殺そうとしたり、痛めつけたりしようとする。」

「人をゆるせないからだ。すべての人間をだ。」

「傷つけたり、殺せば、お前はゆるすのか？」

「簡単に言うな。ゆるす、じゃなく、ゆるせない、だ。お前は高みの見物なんだ。初めて見た時の目でわかった。ゆるす？お前は悪人になるだろう。ゆるす、ゆるさないなんて、自分を高く位置づけているから言えるんだ、平気に。ゆるすことを考えたことがあるのか？」

ゆるしなんて慈悲だ。慈悲は弱さから出やしまい。うそじゃない。強い立場からのおこぼれだ。お前はその立場にいるんだ。体育教師をあの子に送るくらいのこと、お前の考えていることより罪が軽い。お前の方が、俺よりうんと性根が腐ってる。」

エレベーターが一階について、ドアが開いた。エレベーターを降り、玄関ホールに向かった。車いすの患者が看護師と話をしている。青木は、指をさしていった。

「あの車椅子も高みの見物から生まれたものだ。」青木は足を引きずって、そこへ立ち向かっていく、私は制止しようと話しかけながら、青木と早足で進んだ。「青木、おまえの言っていることは、みんな、人殺しの理屈だ、お前の言っていることなんか」「おれがゆるせないのは、お前みたいなやつだ。平気で、うそぶいて、平気で暮らしている奴だ。お前みたいなのがいっぱいいる。人をゆるすなんてことを平気で教えるんだ、お前の友人、お前の将来の子供、お前の連れ合いに！ゆるすなんてことが通用すると思うのか？人をゆるすしてみる。二日後には後ろから槓割で頭を割られるのがおちだ」

「そんな考えをしていたら、生きた心地なんかしない」

前方の車いすの患者が話を終えたらしい。懐から煙草入れとライターを出し、膝上に乗せ、こちらに向かってきた。青木と私は突き進んだ、車いすが詰め寄った。車いすがどかない。車いすの患者が言った。

「どいてくれ」

青木が舌打ちをした。そして、その患者の髪をわしづかみにして、目を強く殴った。患者が目をかばおうとしても、髪をつかんで頭部を揺さぶりながら、「うそつきはお前らだ。」看護婦が甲高い声を上げた。「強い者のお情け、それが慈悲だ」そう言い残し、後ろの方向へと走り去った。目の前を看護師らは走り、横切っていった。看護婦が寄り添った。目のことを訴えている。私は煙草入れが落ちていたので、拾い、膝に乗せると、患者は不愉快な顔つきで、片目を憎しみと痛みで瞑り、顔をしかめ、無事だった片方の目で睨みつけてきた。「おれ、あんたの顔、覚えたからな。絶対に忘れないから、覚えとけ！」そう言いのこし、看護婦と喫煙所の方向へと、タイヤのきしむ音を立てながら、私から去っていった。私は、振り返ることなく、病院の玄関ホールを抜け、マキは始終心配して、声をかけてくれたが、お茶を飲んだりもせず、そのままひとりで帰宅した。

数日後、マキに連絡を取った。次の日曜日に出かけないか、という誘いの電話だ。マキはよろこんでくれ、門限があるとだけ言った。マキはこの頃、私が盛んにマキを求めることを嫌がっているように見えたのだ。確かめようとはっきり言うと、彼女はどこの雑誌の統計か知らないが、受験前に性行為をすると合格率が下がるという統計を引き合いに出し、これを特に心配しているのだと言った。私は笑ったが、彼女は思いつめていたので、説得することもできないことは分かっていたから、向こうがはっきりと求めるまで、求めることはしまいと決めていた。すると、奇妙なことに、マキがそれほど好きでなくなった。嫌いでもなく、好きでもなく、一体マキは私にとってどのようなパートナーなのかが判然としなくなった。

「溝かな」

「そのほうがいいんだ、お互い」

そんな話をして電話を切った。

青木のいない授業を久しぶりに受けたが、なにかほのぼのとした教会で、牧師が説教をしているように感じた。日曜日に、私とマキは変わり映えのしない動物園へと出かけた。動物園のことをよく知っている人になるね、と言うが、その通りで、動物のことよりも、動物園の施設自体に詳しくなっていくだけであった。そして、動物園に来る人に詳しくもなっていた。連休も続く日だったせいか、いつもよりも人が多く出ていた。マキとは、ペンギンコーナーわきのベンチに腰掛け、マキは苛立って子供の世話をするようにストロベリーのシロップをかけた氷を盛んに突っつき、私はメロンのシロップをかけた氷をゆっくり突っついていった。

「ね、危機だ、っていう感じがしたら、こんなことしてないわよね」

「どういうことだろうか」

「だから、仲がお互い悪くなってしまって、別れ話にまで行って、そういう状態で、こうしていること」

「かなり堪えることを言うんだね」

「だって、何でも、はっきりさせときたいから」

電話まで走って行って、どこか気の利いたレストランを友人に聞いて、予約を入れることを言っているのだろう。

「動物園はマンネリだな」

「そう、新鮮味のない時って、何もかも新鮮じゃなくなるでしょ」

「誰か好きな人でもできたのかい？」

「うん」

「そうか」

眉を引き上げて尋ねてきた。「え？そうかで、すますの？」

「うん。おれもいる」

「うそよ」

「いるんだ、あいにく」

マキが氷を突つくのをやめて、しゃくって、氷を口に入れている。洗濯しているような顔つきをしているのを見ながら話しかけた。

「とてもきれいな人だ。そう言うと、マキはふてくされる。ぷうって、本当にふてくされる。そして、振り向きざま、その氷をペンギンコーナーに」

言い切る前だった。本当に放り込んでしまった。ペンギンの水槽が鱚の血のように染まった。

「ごめん。おれは冗談が下手なんだ。本気になるとは思わなかった。すまなかった。」

「今ね、実際に経験してないけど、さんざん遊ばれて、捨てられた人の気持ちを味わった気がした」

私は少し意地の悪いことをされた気分を味わった。そのため、少しイライラしていたので、体をひねって、手に握ったメロンの氷もペンギンコーナーに放り込んだ。

連絡を受けた警備員が駆け寄ってきた。私たちは一緒に事務室に連れて行かれた。スタッフがいろいろ説明をしていた。聞いていて、私が一番おかしかかったのは、「そんなペンギンでも」と言ったところだ。なぜか、それがすごく可笑しくて、大声で笑い転げた。

マキが不思議そうに見ている。私は笑いすぎて、自分たちが何をしたのかもわからない状態だった。だが、笑いは一向にやまずにいて、結局警察を呼ぶと脅かされた。マキが代わりに謝っていた。スタッフは、今度見つけたら、入園拒否しますから、あと学校へ連絡を入れますから、と言われた。そして、今日は、このようなことをあなた方は起こしたのですから、すぐお引き取りください、学校関係者を入口の詰所まで呼びます、と言われた。マキが両親の言いつけなのか、自分の方針なのか、学割のためか知らないが生徒手帳を持っていて、それを福祉手帳のように手渡ししてしまう。マキがすごく年取ったようにうつった。私とマキはひどく怒ったスタッフ三名のあとをついていった、一人のスタッフに、マキの手帳を手渡し、「詰め所で」と言って、合図を送っていた。私は、あまりいい合図でない気がしたが、その時、目の前で、バットをぶんと振られたようになり、私の顔面に何かが強く当たり、後ろに倒れてしまった。スタッフが駆け寄り、人が変わったように「大丈夫ですか」と言っているが、何が起こったのかわからず、立ち上がろうとすると、「顔を動かさないで」、「救急車」と言う声が聞こえた。私はどうにか腰を浮かせようと、地面に片手を突くが、顔が重くなって、下に向いてしまうのだった。「じっと、上を向いていてください、頭を打っていますから」。横になったまま空を見ていた。二つのスタッフの大きな灰色の顔と青い暑い夏の空が大きく見えた。

相殺と言う言葉が、「そうさつ」でなく「そうさい」だと初めて知った。御咎めなく、病院へ連れて行かれた。親が集まりだし、お互いに詫び、ついているのかついていないのかわからず、静かになった。動物園の関係者が帰り、両親らが見送ると、病室で、マキが言いだした。

「私が原因を作ってしまったんです」

「いいや、そうじゃないんだ。少し、平気すぎたんだ」と言った。マキの両親が不思議そうに見た。

「平気？」

「ええ、平気すぎたんです。なにもかもが」マキに目配せをした。

私は、うすぼけた意識の中で、お互いの両親があいさつしあっているのを見て、マキと結婚するところなのだろうと予想した。さいわい、脳に異常はないと言っていた。

青木が私の鼻をねらって、動物園の人ごみに紛れて打ち込んできたのはそれとなくわかった。しかし証拠はなく、防犯カメラは今ほど発達していなかったのだから、結局子連れの親子のうちお母さんの方が、足を引かずった人という証言だけで、警察の立件までには至らなかった。

夏休みになった。私の親せきの住む田舎にマキと出かける計画だった。マキも両親から許可をもらったと言っていた。海の近くの親せきの家に半月ほどいる予定だ。他のクラスメートは離島に行くなど計画を立てていたらしい。

電車内は、発情していた。海岸沿いに走る列車なので、誰もがパートナーを選んでいて、きれいに着飾った女の子は、蠅のように男が群がって追っかけまわしていた。「蠅のように」というのは、マキが眉をひそめて言った例えだった。長い、ゆっくりとした鈍行列車は、速度の遅さと目的地に着くまでの時間の進みが緩く、私は苛々していた。マキは爪を切っていた。「家で切らないのかい」「ええ、こう暇だってわかったから」「なんて、おそいんだ」

海水浴場とは違う海岸まで徒歩で30分以上かかる無人駅で降りた。そこに親戚の家がある。駅前にぼろぼろの自転車があったので、それで家に向かった。「いいの？窃盗だよ」「タクシーひろう金がないんだ」タクシー運転手はいないくらいに人がいない駅だ。マキは捨ててしまえばいいのに、「夏の思い出」と言って、切符を持って、ポケットにしまった。「夏の思い出」という言葉をそれとなく私は聞き流していたが、何か殺されるんじゃないかという不吉な言葉に聞こえた。それを最後に消えてしまった高校生カップルという具合に。「こげな、村さ、来ておくん、で」と自転車の後ろでマキがふざけた。「東京の人だ。一世代前から東京人だから、訛っていないんだ。ああイライラする。なんて暑さだ。」「しょうがないでしょ。夏なんだべし。」「怒られるぜ。夏なのは、確かにそうだけどね。」

切りそろえた高い生垣の間を走る灰色の田舎道をペタンコにパンクした自転車をこいで、カーブの手前、途中の、一軒の赤い屋根の平屋の店があった。アイスクリームの氷温ケースの上に粗末な台を乗せ、その台の上に、畑からもいできたらしいトマトや菜っ葉、木瓜などの野菜をざるに乗せて並べ、土間に日の光が差し込んだ店先から奥の薄暗い店内には、ちり紙やたばこやカップめんなどの雑貨を売っていた。その店にはおばあさんがいて、私たちはコココーラを二本買って、マキが白地に赤のパッケージのキャビンを一つ買いこんだ。私たちは生意気にも、店先でコココーラを口にして、キャビンの封を切ると一本ずつ丁寧に取り出し、煙とたわむれた。口に含んだ煙草の煙は甘いとも辛いともいえない味で、乾いた草のいい香りだった。すうっと吹き付けると、煙の線がとても大人っぽく感じ、それだけで満足だった。くわえたばこで、ポンコツ自転車を再びこぎはじめ、確か、藤色の正面の壁に紺色のロゴが一文字ずつ張り付けられている電気店があって、その脇を斜めに小道が坂になってうねって切り下がっている記憶がある。それを頼りに、電気店までひたすらこいだ。

「スス、ハハ、スッス、ハハ」とマキがふざける。「毎日漕いだら、太ももがマンガの骨付き肉みたいになるね。わたしがはじめに食べるわ」

「人の肉はどんな味か知っているのか？」

「酸っぱいって聞いたことがある。」

「ちがう、すごくうまいらしいんだ」

記憶どおりに小道があった。墨色のガラス戸が電気店の正面に並び、それを右に目にして、茂みの小道へ入り込み、下り、自転車をそのまま進めて、滑らせると、がたつきながら、坂を下っていった。「ここから、家、近いの？」「ああ、すぐそばだ」杉木立に夏の光が斑に差し込み、用水路の水音が深緑色の風景の中、セミの鳴き声とともに、大きく広がり、マキは「すんご、田舎だんべ」と言った。

石屋なのか、ゴロゴロと直方体の石が転がったり、積み重なったりする大きな屋敷が正面に愚鈍に居座り、道が二手に分かれ、私は右に進んだ。竹林が身を乗り出すように道を見下ろし、その道を私は汗をかきながら進んで、あと少しと行っていくと、消防小屋が見えたので、自転車を止めて、タバコを吸っているマキに小屋を指でさししめした。「あの消防小屋があるだろ、左に、用水路の近くに」左に曲がりくねる道の向こう脇を流れる用水路があり、それをまたぐ形で消防小屋があった。「あの中のポンプ車で、伯父さんは指を切り落としてしまって、今は小指がない。その消防小屋の真正面が伯父の家なんだ」「何か、嫌味な小屋ね」「ああ、伯父さんは、ことあるごとに小屋を憎んだらしい。小声でつぶやいて、少し変な時があるけど、気にしないほうがいい。

すぐ直るから。治療は完了したって、母さんが言っていた。」「指の」「いや、ここだ」と言って、私は頭を指さした。「だいじょうぶかな」「だいじょうぶだと思う。それと、関係があるのか知らないけど、鼻が一切機能していないらしい。だから、煙草臭くてもくわえていないならわからないんだ。奥さんは、元少女Aっぽいところがあるから、平気だよ」「おお、そうか。」「また田舎を馬鹿にしていると、奥さん、ぶちぎれるよ」

ちゃらん。らん、らん、ちゃらん、と言って、伯父の家から水色と黄色がまぜこぜに塗られた三輪車が飛び出して、鼻を垂らしたように見えるバカそうな子供が赤い丸帽子をかぶり、にこにこ笑って乗ってきた。「伯父さんの子供だ」「ね、何で、あれ、黄色のラインが入っているのかしら」「伯父さんがペンキで塗ったんだろ。どうみたって、あれは後から筆か刷毛で塗ったくった色だよ」水色が本来の色なのだろうが、黄色のペンキが乱雑に刻むように塗られていて、おまけに乗っている子供は、夏だというのに、黒い毛のマフラーをしていた。子供は、その三輪車を道路いっぱいまで飛び出させると、急に屈曲をし、旋回し、消防小屋の方に近づいて、湾曲して、生垣の向こうの敷地内に姿を消した。私は自転車を手で押して歩いた。マキは、足でタバコを消してついてきた。高さが、三メートルくらいある生垣に自転車を傾け、歩いてそこを越して、曲がると、右に茶色のトタン張りの屋根で、周りを白い分厚い木の板で囲んだガレージがあって、伯父さんの大型バイクが巨大な蟻のように傾いて止められ、古い黄色のマスタングが乗られていないらしく駐車していて、ほとんどは、その隣のホンダの小型車を使っているようだった。白の玉砂利が母屋の庭先の芝生の前に広がっていた。庭先の芝生の上にはビニールプールがあり、そこで先ほどの弟と思われる二三歳児くらいの子供がおしゃぶりをくわえて立っていた。そのプールの縁に乗り出すようにして、母親はしゃがんでいて、髪をうしろで結わいていた。そして、プールの中に手を浸して、しゃくっては、その小さな子供にやさしくかけてやったりしていた。三輪車を下りた先ほどの子供は、走りながら母親の後ろに回り込んで、半ズボンを自分で下して、母親の頭にちんぼをなすりつけようと試みた。気づいた母親は振り返りざま、手でとっ捕まえようと伸ばし、「馬鹿！ ちよん切るよ。この馬鹿！」と叱りつけるが、その手は尻を叩こうとして、空を切り、子供はいそいでズボンをあげ、逃げてしまった。プールわきには赤のハイヒールの靴があり、その隣に、水中ゴーグルが傾いて置いてあったのを先の子供は、ぐるりと回って、ひたたくり、頭に装着した。プールの中の子供は手をぱちぱち叩いてはしゃぎ、一方うるさい子供はゴーグルをつけ、ふらふらして、プールに入ろうと、靴を履いたまま跨ごうとして、身を伸ばした母親が頭をパン！と叩いた。「馬鹿野郎、靴はいているだろ」と苛立つ声をあげ、子供は相当強く叩かれたらしく、頭を抱え、その姿のまま三輪車に乗った。砂利の上をその三輪車は不規則なイライラする動きで回転しだし、その頭痛がしてきそうな回転を続ける三輪車の向こう側で、伯父が大量の靴をひたすら磨いていた。すぐ手の届くところに、サッポロビールの缶が三つ、ガラスの灰皿と、青いライターを乗せた赤ラークがあった。

「伯父さん。」私は近づいて声をかけた。返事がなく、もう一度「伯父さん」と声をかけた。マキの方を振り向くと、下から子供に睨まれていた。マキの股間をまさぐるように求める手を、片手で払いのけつつ、もう片方の手で、顔面の水中ゴーグルを押しているの、子供の頭がのけぞっていた。「伯父さん。」靴磨きをやめ、振り向いた。じいっと目を見つめてくる。

そして、首が小刻みに左右に揺れ、やっと話し出した。ちょうど話す機能を担う脳の部分にたどり着くまでが、なかなか出ない電話のように思えた。しゃべり方もものんびりで、途中でチャイムが鳴ってしまうくらいに遅い。

「ああ・・・半月泊まるって聞いている。・・・電話と手紙があったんだ。遠くだったでしょ。飛行機がないから、・・・時間的には、北海道の方が近いんだよ。ここは、さあ。・・・」

「すごくのろい電車でしたよ」

私の顔から視線を上に向け、空を仰ぎ、何かを呟いている。

「そうそう、距離は、北海道の方がとおいんだ、・・・地理的な距離は近いんだ。でも時間を考えると、北海道の方が近い。・・・それを地図にしたのを見たことがある。・・・変な人のイラストが生物の本に載っているだろ？人を横から見た絵でさ、目があって、口が異様にカーブしてにあぐり下に伸びて、足が頭の上にあって、手がによっきり出ている、変な人のイラスト、あれと同じで、変な日本地図を見たことがあるんだ、・・・時間を距離に代えた変な日本地図・・・」

「ちょっと、思い出せませんが」

「あるさ、あるとも。変な地図なんだ。その医学の本にも出ている変なイラストと同じくらい変なんだ」

そう言って、小刻みに揺れる手を伸ばして、赤ラークをつかんで、カタカタ揺れながら、一本取りだし、火をつけた。どうにか煙草をくわえると、先がじりっとオレンジ色に光った。

「それと、友達連れてきたんです」

鳥が上空を旋回し、盛んに何かを求めているのか、警告なのか鳴いている。伯父はラークをおいしそうにちゅうと音を立てて吸い込み、煙を呑んだ。そして、ゆっくりと肺に充たすと、力尽きたように煙を吐き出した。そして話をしようとする際に、口の動きが、接触不良の機械のように動いたり、止まったりして、また一服した後、ようやく話し出した。

「聞いているさ。・・・あなたのママは何でも話すから。・・・そうさ。恋人なんだよ。正式な関係という。友達というのはそれを隠す若き恥じらいというものだよ、ぼくは新鮮で清潔感があると思う。ぼくも妻と癒着したのは17の時だ。大丈夫だよ。ご飯を食べているかい？」

「駅前に何もなくて」

「いや、そうじゃないんだ。健康の秘訣は食事なんだよ。正常の関係を保つのは食事なんだよ。だから御飯は三度三度、嫌でも食べることが病気を治すんだよ」

「病気？」

「うん、健康の女が病気だよ。」

「伯父さん、いまのは分からないやあ。」

「いいや、健康の反対は病気だということを言ったんだ。男の反対は女だろ。合成してごらん。健康の女は病気。病気の男は健康。難しく考えすぎだよ。ハハハ。」

伯父とこうして話をしていると、なにか人としての気力というか芯という感じの根っこがスカスカに抜けてしまうようになる。力のない笑い声とかを耳にすると、腑抜けになった気がする。マキが子供を振り切って、私と伯父の方に近づくときに、母親が子供の腕をとり、尻をしこたま叩くと、えーんと泣き出し、伯父は、何日も物を食べていないような声で「あーあ、あーあ」とだけ言った。

マキが心配そうに振り返りつつ伯父に挨拶をした。

「ああ、あ、そうだね、ごはんの時間だろう。それより、ぼくは靴をたくさん磨いていたらしい」

「伯父さんの靴ですか。全部」とマキが尋ねた。

「ああ、ああ、そうだ、といえるかもしれないけど、あーあ」

「どうしたんですか」と私は変な予感がして尋ねた。質問と答えが一体になっていないのは分かるのだが、それよりも、伯父はその時明らかに、何か心をとらわれていた。

「子供のことでですか」

「あーあ、ああ、そうともいえるかもしれないけど、あーあ」

「どうしよう」マキが心配そうに言った。子供が泣いている。「私が悪かったのかも」と伯父に否定してもらえるように尋ねた。

「そうだね、君が原因だよ、ぼくの子供が叱られているのは」

「ええ？」マキが助けてほしいように私を見つめた。

「伯父さん、海岸まで行ってきますよ。」

マキがあわてている。鳥が私たちの上空をぴちぴち鳴きながら、飛んでいた。さっきから鳴いていたのだが、しばらくして、ミンミンゼミだけで、静かになったかと思ったら、いきなり、母屋裏の林の一本の黒っぽい大きな木がわさっと揺れて、鳥がギャーイ、ギャーイ、と叫びだした。髪を振り乱すように大木が揺れ、おそらく中途半端な鳥の数でなく、その鳴き方が異常だった。それに、小鳥とは考えにくい大きさの気がした。「なに、気味悪い鳴き声ね」とマキが言ってしまう。「え。子供の泣き声がかい！」伯父の目が大きく見開いて、マキを恫喝するように言った。

「もう、私帰る」と言い残して、マキは踵を返し、道路に出ていってしまった。「伯父さん、あとで電話しますんで」と言い残して、マキの後を追った。マキは泣いて歩いていた。手を振って、怒って歩いていた。追いつき、私は「だいじょうぶかい」と声をかけた。マキが歩くというので、自転車をそのまま生垣に置いて帰ることにした。「夜中になるよ、東京は」「いいわ。もう、絶対、ここに来ないから」「伯父さんの調子が少し悪かったんだよ。ごめんね」

私たちは、そのあと、一駅先で降りて、海岸沿いの黒い木造の古い旅館に泊まることにした。部屋は二階だった。

翌朝、障子を開けると、夏の光とともに前面に海岸が広がって見えるので、少しは気分がよくなったと言っていた。陽光を浴びた白波やピンクとオレンジの砂浜を見ると、もう少しいたいくらい、と言っていた。

海岸に行き、あの砂浜の淡い色の正体が貝のかけらだと知り、旅館を後にして、列車に乗り、東京についた。マキに何度も謝った。

家に帰ると、母が、「伯父さんから電話があったのよ。マキちゃんにさかんに謝っていて、電話番号を教えてほしいっていうから、ダメですよ、と断ったのよ」と、困った顔をして言った。「ああ、伯父さんがマキを脅かすように怒鳴ったんだよ、全く」「あらら。親御さんに連絡入れとくわよ、申し訳ないわね、ほんとにあのバカは！」母がそのあと、連絡を入れ、何度も謝っていた。ところが、この伯父が、思わぬ行動をとった。私は、迷信を信じやすい。よく虫の知らせというのがあるが、それと同じように、この伯父に何かが伝わったらしいのだ。そのため、マキは伯父に感謝をし、伯父はマキに許してもらうこととなった。しかし、それは、だいぶ時間やいろいろな出来事があった後の頃だった。

夏休みの半ばに一本の電話があった。伯父からだ。伯父は、暑さのためにぼんやりとしていたと、さかんに謝り、それで、学校はいつから始まるんだ、と聞き、私は、九月の頭で、その前に補習授業があるから、もうそちらには行けないと言った。話し方が速いので、嫌な予感がした。薬を飲んでいないのではないかという予感だ。

――で、マキさんという人は、同じ学校で通っているんだ。

――ええ、同じ学校ですよ。

――伯父さんの頃は、もう覚えていないな。もう何十年も前だね。学生運動の頃だろうか。なつかしいな。学生生活か。なんて言う学校だい？確か入学祝に図書券と文具券をプレゼントしたっきりだったね。

――申し訳ないです。お礼を忘れてしまって。

――仕方ないさ、その頃、ぼくは具合がひどかったんだし。安静室に長いこと拘禁されていたんだからさあ。

――××高校ですよ。

電話が切れた。ぼくは何度かフックをカチカチ押したが、話し中の音だった。補習授業をし始めるのが、夏休み後半の二週間弱だった。その授業を私は欠席をした。夏風邪を引いたからだ。マキにうつすといけないので、マキとは電話で話をした。

――あの、海辺の旅館に来年も行かない？

――ああ、いいね。行こう。それから、板書とプリントのコピーありがとう。母からもらったよ。けっこう難しいね。

――あの、今回の先生は卒業生だって。それとさ、汚れた黄色のムスタングがいつも学校の前に止まっているんだけど、伯父さんかしら。

――ああ、たぶん、そうだ。電話があったんだよ。母さんから電話を掛けさせるよ。

――お願い、いつも減速して、付けてくるのよ。家の入ると、ブルルンとって、いなくなるの。気持ち悪いのよ。

――伯父さんなりのお詫びだと思うけど、母さんに言うておくよ。

この電話が終わって、母は伯父の家に電話をかけたが、伯父は行方が分からなくなって、二週間近くっていると嫁から返事がきた。その頃携帯電話を持っている人は、ほとんどいなかったから、連絡を取るのも大変苦労したものだった。そのため、私が、風邪がちょうど治るころに、学校の前で待って、伯父を捕まえることができた。

「伯父さん。ダメですよ。マキが怖がっています。」

「いや、ぼくは、マキさんには失礼なことをしたんだから。お詫びをしなくてはならないんだよ。」

「大丈夫ですよ、ぼくから言うておきます。伯父さんが謝りたいって言うてるって」

「会って話すよ。」

結局下手に断るとかえって、伯父の頭が混乱するので、私は、車に乗り込んで、マキが校門を出るところを待っていた。マキがふと出てきた。

「伯父さん。今、ぼくがおりますから」

「黙って、このままつけよう。」

「駄目ですよ。怖がります」

「違うんだ、マキさんを前からずっとつけている男が何人か交代でいるんだよ、ほら」

伯父は、写真を出した。携帯で撮影をする時代じゃないので、半端な写真代じゃないと思うくらいに写真が束になり、その写真の裏に符牒を書いて、それを紙に写し、法則性を見出していた。

「ぼくは、さあ、こうしたことが好きなんだよ。あれ？」

マキが消えた。伯父は、車を急発進し、乱暴な運転をし、歩行者をクラクションで威嚇して、どかし、一台のグレーの国産車を見つけた。

「そのナンバー22があるだろ。その車と今の車が同じだとおもうんだ。」

グレーの車の後部座席はフィルムが貼ってあるので、わからないが、車内に連れ込まれたのは分かった。それもそうだが、伯父はおそらく薬を抜いているらしい。話し方と頭の回転が異様に速くなっている。

「追いかけるんだ、追いかけるんだ」

「警察が一番ですよ。」

「ぼくを誰だと思っている。」

「え？」

「だから、ぼくだよ。こんなぼくが警察に相談してみろ、信用してくれると思うかい」

確かにそうだった。車が荒れた工場などにはいかず、マンションに向かった。そして、そのマンション前で待機して、一人が下りてきた。青木だった。そして、青木は、その待機している車に乗り込んだ。伯父は、しばらく指を齧っていた。そして、吸殻が噴き出している灰皿を確認すると、さらに一本、火をつけ、ラークを吸い出した。いらいらして煙草を乱暴に吸い続けてから怒りだした。

「だめですよ。今、何もしていないんですから。」

青木を乗せた車が動き出した。マンションから精神病院脇の路地を出た時、私は黄色のマスタングなどで付けていたら、すぐにわかると呆れていると、案の定まかれて、グレーの車とともに、マキは消えた。

「また伯父さん、なんで、こんな派手な車で尾行しているんです？」

「地味なのは、警告にはならないんだ。危険信号を出しているんだよ。マキさんに何かあったら、どうなるかという」

そのマキがいなくなった晩に電話が入った。私と両親が病院に駆け付けた。「服が破れてしまって、警察には捜査をしてもらっています。」マキの両親が泣いていた。私は病室に入ることを両親からゆるされていたが、マキが私を見ると大きな叫び声を出したので、そのまま帰ることにした。

家に帰ると、伯父は仏壇のまえで儀式のように、頭を何度も下げていた。「伯父さん、誰と話しているの？」「え、話してなんかいないさ」明らかに薬を抜いている。動作が素早すぎるのだ。

事情を伝えると、伯父は、「警察が動いてくれるならそれでいいと思う。ぼくは帰ることにする。」と言い残し、家を出て、低いエンジン音が響いて遠のいていったが、それで終わるはずはなかった。数日のうちに伯父は青木とその顔見知り、つまりマキを連れ去った連中を半殺しにした。中には車で引かれ、腰骨を複雑骨折した者、伯父の歯形が頬や腕、体のあらゆるところにきつく残り（その肉の一部は行方が分かっていない）、不幸な目にあった者、

耳が食いちぎられ、探したら、その耳が耳たぶだけが見つかり、あとのほとんどは消えている者、唇が口の端から垂れ下がって揺れている者もいたらしい。青木に関しては、マンションから出たところを車ではね飛ばしたという。そのため、青木はフロントガラスに頭から突っ込んだらしい。伯父の標的に共通しているのは、多分『ゾロ』の影響なのかしらないが、頬に何か硬いとがった金属（車のカギか何かわからない物）で付けたひっかき傷でチェックマークを入れているところだった。処分し終えたことを示したのかもしれない。しかし、それだけにとどまらず、伯父の好きな『フレンチコネクション2』は、確実に頭の中で再生されたらしい。それは、公衆電話から、110番し、住所を告げ、「これからネズミ退治だ、おい、それから忘れるなよ、たくさん水を用意するんだ」とポパイ刑事のシーンを再現して、マンションに灯油を持って入り込んだとき、警察に捕まってしまったからだ。しかし、責任能力がないと判断され、不起訴となった。しかし、治療は受けなくてはならず、入院中は、強い安定剤を強制的に飲まされるのだが、伯父はすでにそうした経験をしているので、上手いこと薬を処分したそうだ。コツを聞いたが、あまり意味はなかった。

一方、マキは、カウンセリングを受けていた。ショックをマキは味わい、私を会った時には体重はものすごい減りようで、何をされたとか、伯父のかたき討ちの話などは一切触れることはできなかった。

そして、マキは、二学期の半ばに学校に戻ってきた。伯父が退院して、床屋で髪を切り、私の家に電話をし、「娑婆の空気はいいね」と伝えた後だった。伯父はあの大きな「鳥の木」がある家に戻った後だ。

全てが過ぎ去った後、マキは伯父の無謀さを知り、伯父にお礼を言った。そして、再び「鳥の木」を背景に伯父一家と、マキ、私で写真を撮った。それらは、今からもう、何十年も前だが、マキとは結局は結婚をしないで終わった。写真もどこかに無くなってしまった。今になって振り返ると、元は、この一件が原因だった気もした。それから、私たちには、いろいろな障害が立ちはだかっていたので、マキは別の人と家庭を持つだろうと確信に変わっていった。仕方のなかったことだった。

マキは傷が癒えるまで泣きつづけたに違いない。そして、誰かが母親のように抱きしめられて安心した状態で、癒される時を待っていたことだろう。私に抱きついてきたが、私はマキを慰めることも抱きしめることもできず、何か怖いものと、その当時は残酷だが思ってしまった。マキの家族が泣いているマキの後ろに立っているように見えた。そういう想像の中でも、私はマキを拒んだ。それ以来、マキは以前のように私に冗談を言うこともなく、ただ、パートナー、臨時雇いのパートナーのように、私と行動を共にしただけだった。羽を休めて、休息をし、嵐の去った時に飛び立つ小鳥のように、マキは私のそばにくっついていて、いとおいしいと思うこともなかった。先が全く見えない状態のまま、二学期の半ばをこえた。

マキは、進学コースを選んで、私と同じにはなったが、常に窓を見ていて、物憂げに学校生活を過ごしていた。建設中のマンションのイラストを毎日私に宿題のようにしてみせた。何人かは現場で死ぬのかもね、と付け加えて。実際、マキはそうは思っていなかったかもしれないが、通学服を着て、学校に来ることすらも面倒くさい、できることならやめてしまいたい、そんな心情が伝わってくるようだった。予備校に通う話も気の乗らない感じで一緒に通った。夜の七時ごろになって、書店が水道橋にあったので、バスの時間まで、付き合っ立ち読みをしてくれた。

マキは、そのあと、水道橋から坂を上がり、お茶の水の方向に向かう。マキはわざわざ逆方向に来て、戻っていく。その道は暗いので私が見送ることになり、これはあまりにも効率が悪いので、電車でしようと提案した。でも、あの伯父の家の帰りのようにして、マキは怒って坂を上がっていくので、私もついて歩いた。

「別に、いいのよ、無理しなくても、気がないなら」

「いやな言い方するなよ。暗いから危ないだろ」

「こんな私を相手にするようなら、相当、飢えてんだ」

「何も言えないな、そんな風じゃ。じゃ、はっきり言おう。ものすごく好きだ。けれど、すごくこわいんだ。変だろ。」

「何となく、わかる気がする。あのことが無ければよかったのにね。ありがとう。」

「そうじゃないんだ」

「いいんだよ。無理しなくても。気持ちはわかるから。」

「どうだろ。今度映画にでも行こうか」

「英作文の練習問題にあったね、そんな日本文。」

「一緒になればいいと思う」

「え？それ、プロポーズのつもり？私たち親に養ってもらってるんだよ。後始末とか責任とかで、そうしたことの延長で考えているんだ、そうなんだ」

できるとするなら、私なんか目でもない良いパートナーに巡り合って、今そして、それを前後する何年間を消してしまうことを望むだけだ。私は、ただ、マキにしてあげられることは、望むことだけだった。できることなんか一つもなかった。望んで、祈ること、それだけしかマキに対してすることができない。

マキが体から離れようとした。

「きたない。はなが肩についちゃった」

「気にするなよ」

「もう、一人で帰れるくらいに明るいよ。」

「じゃ、あした。」

ある日、下校時、私は、玄関で青木に遭遇した。身をひそめていた。青木は子供たちが床に座っているような玄関の左に並ぶ来賓用の下足ロッカーを見つめていた。一步踏み出して、口をとがらせ、右足でロッカーをひと蹴りした。地震の揺れのような音が玄関ホールに響いた。もう一度、今度は感情に加速がついて、蹴った。蹴ったというより蹴り壊す感じだった。音を立て、プラスチックのカバー数か所にひびが入り、中には扉が開いて、黒い革靴が嘔吐するように飛び出たりした。しかし、青木はやめなかった。弾みはつき、来賓が戸惑い、怯えるような揺れを伴った強い蹴り方で蹴り続けた。ロッカーが一部変形した。遭難者が出た山岳の航空図のような形にへこんだ。数歩、蹴り続けたため前に動いたため、後ろに下がり、へこんだ箇所を再び蹴った。気が済まなかった。廊下を歩いて、消火器を見つけた。左手にぶら下げ、ロッカーに近づき、消火器の底を打ち付けるようにして何度も痛めつけた。蹴っては打ち付け、蹴っては打ち付けしているうちに、カバーは鳴き声のような音を立てて割れて、その破片が抜けた歯のように飛び散り、へこみを中心に打ち付けたため、へこみは腹を抱える人のように見えた。ロッカー全体がゆがんで斜めにずれた。ホールに音は響き渡った。

「なにをしているんだ！」

英語教師がとがめた。青木は、翻って、屈み、消火器を振りかざした。顔は冷静で、落ち着いていた。感情があまりにも激しく、表情を作るのに間に合わないかのようであった。教師は、手をかざし、本能的に頭部を守る姿勢をとった。青木の抱えた両手から、固まった血のような色の消火器が投げつけられ、それはひゅんと唸り、運よく、その教師の頭上を飛びえ、玄関の広く設けた何もない床に転がり、頭部に損傷を受けた鳥のようにくるくると回転をしつづけ、やがて金属とコンクリートが触れ合う不快な音を立て、ぶるぶると震えて回転を止めた。

「ちょっと来なさい」

教師は手をかざすのをやめ、青木をねめつけ、穏やかに警告した。

「ちょっと、来なさい」

教師の手が青木の腕を握ろうとした時、その手は空を握り、傾いた顔面へするどい肘が鼻をもぐように抉った。歯の折れる音が頭の中に響いた。かき碎かれた芯を突く強い痛みの波紋が、鼻を中心に太くうねり、ゆっくりと重く広がった。目から涙が出てきた。両方の手で鼻と口を守るようにして抑えると、指と指の間から鮮やかな血が噴き出し、おもらしをしたように流れ出て床に血だまりをつくった。教師は痛みをこらえた。鼻が折れているのは間違いなかった。歯が麻酔を打ったようなしびれた痛みで麻痺をおこし、前かがみになった。すると誰もいないのをいいことに青木はその教師の後頭部を押さえつけ、土下座させるように重い石を乗せるように下に向け、ぐいっと、力を入れた。教師は顔を抑えて、唸り、噴き出そうとする痛みをこらえ、書類をわきよけ、正座をして苦しんでいた。痛みの沼に浸かった教師の息づかいが荒い。自転車の空気ポンプを踏むように教師の後頭部を踵で踏みつけ、足の裏で頭部を破壊しようと何度も踏みつけた。教師は立ち上がろうとしたため、動いた。青木は目ざとくそれに反応し、再び足で踏みつけた。教師を膝の上に背中をあてがい座らせると首に手をまわし、ひねった。何度か教師の頭が揺れ左右にひねられた。勢いをつけてみてもうまくいかなかった。

マキが現れ、私はいそいで傍に駆けつけた。取り乱したマキは、大きな声を出した。私は、隙を見て、廊下を走り、非常ベルを鳴らした。教職員室から数名、警備担当から数名が玄関先に向かった。

「ここです。ここ！先生を殺そうとしていた。先生を殺そうとしていた。」

マキは髪を掴んで、悲鳴を上げた。養護教員が駆けつけ、マキの肩を抱きしめた。血だらけの教師があおむけで失神していた。養護教員がマキを保健室に連れて行った。駆けつけた教師らが、英語教師の手当てをしながら、中空に向け、叫び続けた。「救急車！救急車！誰か呼んでくれ、救急車を！」騒がしい足音が玄関から散り散りにほとばしった。私は事情を説明するので、教師、駆けつけてきた警察と対応していた。

＊

青木が姿を消して数日後の夜、私は、マキの家に直接行くため、水道橋からお茶の水の方向へ歩いて行った。街灯が薄暗い線路脇の急な坂を上がった。勾配のある車道の反対側から、影が私に向かってきた。青木だった。耳元で話した。「マキを味わったぞ」

私は黙っていた。

「お前のものを奪ってやる。何もかもだ。これから付きまとして、全てを奪ってやる。」

私は、影に掴みかかり、おもいきり蹴ったが空振りし、バランスを崩して尻をついた。脇腹に青木の足の甲が空虚な音を立てて叩きつけられた。肺を打たれたので、息が止まり、抑えて丸まった。しばらく息ができずに苦しんだ。私は立ち上がるが、全てかわされ相手にはならなかった。青木を腕力で倒せることはできないことが分かった。その後、蹴りあげられ、上半身が浮き、横に滑り倒され、地面でこすれ、服が破れて、血がにじんだ。青木に蹴られながら、私は這いつくばって、坂上近くの駐車場へと転がり込んだ。

上からまともに顔を踏みつけられ、踏みつけられたあとに、腕で顔をかばっていた。その腕で顔を保護すると、わき腹や股間を痛めつけられた。全く歯が立たない。覆い被さってきて、馬乗りになった。青木は振り下ろす拳で顔面を砕くほど殴り続け、鼻血と涙が出てきた。不安定にゆれる視界のなかでマキが縮こまっていた。

「俺は、お前のように、何も考えず、社会に溶け込む奴が大嫌いなんだ」白い歯をした影は、殴り、蹴り、叩き、足払いをし、背負い投げで地面に打ち付けた。受け身のとれないように放り投げ方を変えていた。そのため、腰に強い痛みが刺し抜いた。襟首を掴まれ、駐車場の太い柱に引きずられていった。

マキは声が出ないようだ。そして、後ずさりして、その駐車場から離れていった。再び、顔を拳で繰り返し殴りつけられた。唇を切っけてしまい、おそらく顔は腫れ上がるにちがいない。青木は事務作業をし終えたように立ち上がり、見下ろしていた。「いいか、お前も平気で取引をしている。だから、俺はお前から奪う。人から奪う。おい、てめえ、わかったかよ」そう言った。

後ろを向き、立ち去っていくかと思った。もうこれ以上殴られたりしないと油断した。だが、奴は、もう何も見えなかったのだろう。私はもう人形だった。後ろに腕をねじ入れ込まれ、両脇を両膝で押さえつけられた。手加減なく殴り続けられた。その拳は一発ごとに岩のような重みとそれに伴う痛みが顔に伝わってくる。殺すつもりだ。殺しにかかっている最中なんだ。きっと殺される。こいつはもう普通じゃない。人でもない。命を奪いにきたんだ。両親の授けてくれた命をつぶそうとしている。汗だくのやつ顔が手術を執刀しているように澄まして見えた。中央線が空気を打ち破るような速度で通過していく、救急車のサイレンが鳴り響いている。マキが呼んでくれたのか。何か静かになった。突然、目の前が真っ暗になった。青木が上着を頭にかぶせてきた。そして、腕を折り曲げ、喉にあてがい体重をかけ、大きな手で鼻と口に押し付けてきた。必死に空気を求めた。嘔みつき、引きちぎろうとしても口が何もくわえない。空気はいってこない。心臓が弾んで破裂しそうだ。体をどう捻じ曲げても腕は後ろに回って動けない。死ぬんだ。僕は死ぬんだ。殺されるんだ……

突然目の前が明るくなり、押し付けてきた全部が取り去られ、空気が入ってきた。寝覚めの時の呼び声のように誰かが何か話している。無線の音がしている。赤いライトが光っている。警察だ。マキが呼んでくれたのかもしれない。飛び交う無線の音が水をやっと飲めたように感じた。空気を大きく吸い込んで、倒れた。

小石の散らばる地べたに蟻が街灯を浴び、体の一点が、白く光りをはじき、動き回っている。新聞紙が丸まって車のナンバープレートの前で引っかかっていた。赤色灯で人びとが立ち止まって見ている。

「マキ。連絡してくれのか」

「うん。救急車来たよ」

ストレッチャーに乗り、頭を横に動かそうとした。救急隊員が「上を向いていてください。首を固定します。頭を保護します。」と言った。その救急隊員は声だけで、顔を覚えていない。

その時覚えているのは、顔を横に一瞬向けた時の光景だった。それは青木が数人の警官に抑え込まれ、顔を振り、もがき、必死に、あらんばかりの声で叫んでいる姿だった。青木の叫び声は、人里にうっかりあらわれて、撃たれて、絶命する小熊の叫びを想像させた。

私は、救急車の中に運ばれていった。救急隊員が確認をして、ドアは曇った音を立て、足元で割り切れる数のように閉まった。救急車が走り出した。私は目を閉じ、青木とは一生会わないでいることだけを祈った。青木がどんどん小さくなって、ますます遠く離れていくことだけをひたすら祈った。ただ、それだけを。

追記

私の手元に刑務所からの手紙が数年後に送られてきた。その当時は、住所を知ることは今ほど難しくもなく、それに青木ならそれ相応の者に、調べさせることだろう。長いこと封を切らなかった。しかし、封を切り、読んでみることにした。遺書だった。

挨拶はしない。この手紙から君は、そんな飾り言葉を読み取ろうとは、考えていないはずだ。最初に、ぼくが、あの背の高い男に対して一種嫌がらせという行動をとったのは、まぎれもなく、この世の中には劣等感を生み出す土壌らしきものが見えていたからだった。それは、背の高さ、収入の高さ、学歴の高さ、こうした馬鹿らしき名称をもって、人を秤にかけること——この秤という奴には、ぼくもかけられた、その秤を持つ者は目隠しをしていたのかどうかは分からないが、少なくともしていたことだろう——その「愚劣な秤」にかけられる無垢な人間を考えたとき、逆に、「ぼくの秤」で、まずは、その「愚劣な秤」に乗っている家畜、哀れなものだ、市場で取引されるのと同じだ、瑞々しい目をした家畜、それをいったん下ろす必要がある。それが、一種嫌がらせという行動に君には見えたのだろう。しかし、それはちがう。ぼくは、その行動をとることで、「愚劣な秤」の発案者を、逆に「ぼくの秤」にかけたのではないだろうか？そして、そうすることは、赦されるのではないだろうか？その「愚劣な秤」の発案者なりを、火あぶりにして、清めれば、それはそれで時代さえ間違えないなら、正しいことではないか？発案者を青ざめさせる真実の通告をすること、すなわち、無能さを露呈させることは、開放感を無垢なる人々に味わせ、さらに平静な世界、「愚劣な秤」なき世界を回復させることとなる。それを勘案する、斟酌するならば、安物の模造品じみた秤を考案し、流布させ、一時の流行り病いのような、社会への動揺を生じさせた罪人を裁くことは正しい。「ぼくの秤」で。しかし、そうはいかない。それは時間が葬り去るものだったのだ。時間こそが「正しい秤」かもしれない。結局、ぼくのした行いは、「愚劣な秤」の上の家畜を引き降ろす作業、たった、それだけだったのだ。

美術室の件を覚えているだろうか？あれは、君を貶めようとしたんだ。なぜかわかるだろうか。君の存在自体が、俗物的だったからだ。きちんと学習をし、進学をし、生活をするというコースを大衆は選ぶ。高学歴の大衆だ。その大衆の要素を一つまみとると、君だったわけだ。もし、ぼくと出会っていなかったら、君はあんな目には合わなかったと思う。なぜ大衆をぼくが嫌うのか知っているだろうか。いつだったか、性犯罪の裁判があった。傍聴の動機は何かを記者に聞かれた中年の女は、具体的な行為を知るため、と答えた。

それだけだ。たったそれだけ。あきれろ。それが、大衆だ。傍聴を理解もし、性犯罪の裁判を見に行く。もちろん、性犯罪はしてはならないことと考え、理性的に行動をしている。しかし、その規範が、いかに薄いかを示しているのが、今言った傍聴する動機だ。辞書を持って、パンと見世物を求めるんだ。ぼくが呆れ、嫌いになるのは分かると思う。雑草はとらなくてはならないんだよ。たとえ、それが鳥の餌になったとしても。片岡といったか、絵の上手な奴は。ぼくの絵の下手であることは、自分が知っていれば十分なんだ。それを片岡と比較する権利など誰にもないんだ。しかし、比較するのが、大衆だ。君に攻撃の矛先が向いたのは、君が大衆の代表だからだよ。お気の毒だがね。

教師に関してぼくは何とも思っていない。何を思うのだろうか。彼らは教育と言っているが、教育できないものもあるのを知らない。例えば思想がそうだろうし、趣向がそうだ。暴力を使ってでも何かを変えようとする、これに関しては教師は何もできないのだ。ただ、暴力はいけないこと、これしか彼らは告げることができない。牧師の説教を聞いた後に、教会の裏の草原で青姦をしたりしても、なんとも言えないだろう、それと同じだよ。後程書くと思うが、暴力ほど雄弁なものはないし、強制力の本質は暴力にある、ただ、その専売特許を個人が有してはならないという約束ですべてが成り立っているんだ。おかしいことだ。泣いたりする赤ん坊に泣き止みなさいというのと同じだ。

あと、不思議に思ったろうが、身体障害者に関してだ。ぼくが病院で彼を殴ったのは、髪をつかんで振り回したのは、彼らが一定の強制によって守られている狡猾な考えで保護されているからだ。彼らを守っているのは、彼らがある思想を形成し、その思想を守らないのは人ではないといった考えで推し進めた結果、身障者が無茶をしても我々は何も言い返せないんだ。ぼくはおそらく報道されるならば、世間は眉間にしわを寄せ、なんてことをするんだと憤慨するだろう。しかしだ。その良心の怒りを偽っている人間は、わが子が授かった後、この世に生まれようとし、実際に腕のない子供だとした時、平気でいられるだろうか。ぼくは、平気でいられないと思うよ。みんな嘘っぱちの顔で、身障者を守ろうとしているんだ。その実、そうして禍に私たちは巻き込まれないことを祈る。おかしい話だ。

男女関係は所有関係にあるんだ。お互いを所有している意識でいるため、所有を放棄した時点で、男女関係は解消される。これもおかしい話だ。一回こんなことがあった。タバコを吸っている女がいて、そのタバコの先がぼくの腕に当たった。そうして、ぼくがその女の胸ぐらをつかんだ。すると、オイルのように男が割り込んできた。ぼくがその女の無作法に関し文句を言うのを防ぐわけだ。それが成り立つのは、所有関係からと言えないだろうか？自分の所有物に文句を言われることで腹が立つわけだ。強盗が物を盗んだときに、「私ではございません。私の腕のしたことですから」と言えるだろうか。そこで、「じゃ、お前の腕を切り落とそう」と言われた時、腕を守るために戦うだろう。女のために戦ったんじゃないんだ。「お前を守る」と言ったセリフがあるが、あれは嘘だ。「俺を守る」が正しい。腕と違うことは切り落とすことが可能であることだ。だから、男女関係は、解消されるとまた関係が結ばれる。取り換えが可能だからだ。

もう君に話すこともなくなってきた。ぼくの断片を知っているのは君だろうから。その断片を語るのなら、もうおしまいなのだろう。おそらく知りたかったのは、暴力をなぜ使うかという問題だろう。法治国家がうわべではきれいごとで成り立っているが、その国家を形成しつつ、維持していくのは、根底には、地下には、暴力が潜んでいるのだ。その暴力を個人が用いるのを禁止しているのは、国家が暴力を独占しているからだ。暴力は公的な機関が有するもので、私有ではないといつの間にか決められた。これに対して、どう思う？もちろんこの手紙の源がその暴力によって、行動を不自由にさせられているわけだから愚問ともいえるだろうが。見えない暴力で成立しているのが、ぼくらの住んでいる社会だ。ぼくらが暴力を他から与えられたときには、公的な機関が、「暴力」によって、守ってくださる。「暴力」によって、平和が成立するんだ。平和の裏面には、暴力の顔がいやらしい笑顔で大きく描かれているんだよ。平和を維持しているのが暴力だ。君だって、免許をもてば暴力をふるえるはずだ。暴力は良識と同じく万人に振り分けられている。それを行使することは、自分、ぼく自身というミニ国家を成立するためには必要なのだよ。それを皆はこぞって否定する。おかしい話だ。ぼくを否定してごらん。彼らの背後を見てごらん、合図、シグナルを出しているはずだよ。ぼくが何かやったら、「警察を呼ぶんだ」とダイヤルを回す仕草、110という数字を空中に描くだろう。暴力の対岸には電話ひとつで駆けつける蕎麦屋のような暴力が控えている。出前をとるのと同じように、市民が汚い手を使わず、免許を持った暴力行使者が控えている。単純な人間ほど、「こうしたらね、ぼくは警察を呼ぶからね」という。そいつは白髪があった。ぼくがそいつに詰め寄ったら、そいつは今のように言ったんだ。確実にそいつは悪かったんだ。つまり、白髪をはやしたって、程度は中等教育の段階で知性が止まっている人間もいるんだ。そいつが言ったことは次のように言うのと同じだ。「君が暴力をふるうなら、ぼくももっと強い暴力を頼んで与えるから」というのと同じだ。大の大人が、自己救済するのにそんな言い訳をするんだ。チビの駄々っ子みたいだろう。

最後に一言伝えておきたい。君は動物園に通うのが定番らしい。しかし、君の顔を殴った男は、ぼくじゃない。ぼくは、そいつを知っている。そして、そいつの名前をいうこともできる。それより、もっと重要なことは、ぼくのような人間はたくさん存在するということだ。朝になり、新聞が配られる、世間のこと、世界のことを、人々は、一応は目に通す。しかし、その新聞を見るのは、トーストを齧るサラリーマンのパパだけではないんだよ。ぼくのような人間も目を通すんだ。そして、世界に対してどうあるべきかを確認する。この手紙を最後に、ぼくはこの世から消えるだろう。しかし、ぼくという本質を持った他の僕は、君の隣に、いや君の身内にでもいることを忘れないでくれ。

長くなった。さようなら。

私は青木の手紙を読んでいくと、だんだん自分が嫌になってくる。強盗に説教されている気がするからだ。あるいは、犯罪者に人の道を説かれる気がするのだ。言葉を遺して縊死した一人の人間がいるなら、その言葉をすくいあげることは、残された者の死者への弔いだろう。しかし、私は、この手紙から、彼の悔恨の片鱗を探していたのだった。徒労に終わるのは分かっているが、少しの期待を持って探し続けた。結局は無駄だった。青木は計算しすぎて生きたのだ。生き方が彼なりの現実には通用しない理想で考え、行動して生きていった。それを考えると、私たちは既製品の状態のままで生きているような気がする。うその上塗り生きていくような気がする。この手紙は、いずれは燃やしてしまうつもりでいる。この手紙を手にした時には、青木は拘置所内で首を吊った。寒い冬の時だった。電話も何もなかった。同級生で知っているのもいなかった。マキですら知らなかっただろう。知ったのは、新聞の小さな記事からだった。社会面の切手くらいの記事からだ。私の中から青木が死んでも、記憶は生きる。私の中から青木の記憶が燃え尽きて、消え去ってしまうことを祈って。私は、漆黒の机の抽斗を引き、封筒にしまった青木の遺書を、宙に軽く浮かせて、滑り込ませた。抽斗をゆっくり押すと、骨壺を置くような音を立てて閉まった。(了)